



昨年の「停車場」では東京オリンピック開催に伴う行事の変更について、恨み節のような原稿を書いたが、当時からすれば全く想像の付かなかった世界になった。あれから1年4ヶ月が経ち、現在は新型コロナウイルス感染症拡大という事態に見舞われている。「人生には、上り坂・下り坂・まさか、という3つの坂がある」と友近が言っていたが、まさか1月に高学祭が、しかもオンラインという形で行われようとは、昨年の段階で一体誰が想像できただろうか。

一斉休校が終わり、2ヶ月遅れで高輪にも中学一年生が入学し、当部も17名の新入部員を迎えた。しかし、「旅行・鉄道研究部」という名前でありながら、コロナ禍が収束しない限り、泊まりの旅行はできない。いつになったら従来の鉄研旅行は再開できるのだろうか。

そして、あと4年間は変わらないと思っていた学年主任をわずか2年で更迭され、現在は「入試広報部長」という役職に就いている。倉本教諭が他クラブの顧問になり、代わりに大塚教諭と江戸教諭が顧問に加わり、これまでボランティアで鉄研旅行に参加してくれていた野澤技術職（のざりん）も、正式に鉄研の顧問となった。

昨年の停車場で私は「昔の新聞を読むと未来が見えたような気になる」と書いたが、やっぱり未来は見えないものだな、と痛感している。



今年度の高校3年生は「大学入学共通テスト」初年度の学年である。国語・数学の記述式導入見送りや英語民間試験の延期など、二転三転した国策に最も振り回されている高3生には本当に申し訳ない思いでいっぱいである。最後の盛り上がり行事である高校3年次の体育祭が、一斉休校に伴い中止となってしまったのは残念でならない。

現高3部員は入学時には12名が在籍していたが、最後まで在籍していたのも11名で、入れ替わりはあったものの、引退まで活動した部員数が近年では多い部類に入る。

部長は学期末になると成績認定課題と格闘していたが、普段は性格温厚にして、人望も厚かった。生徒会役員や高学祭執行部として活躍する部員も多く、高学祭直前になると鉄研との両立に苦しんでいた光景が目には焼き付いている。

私が担当している模型班の二人はいずれも個性的でしょっちゅう口論をしていて、気苦労が絶えなかった。しかし、二人が引退して百周年記念館に来なくなると、時々寂寥感に襲われた。

この停車場が発行される頃、高校3年生は自宅学習期間に入っている。3月15日の卒業後に進学する大学もまたオンラインでの授業が中心となり、世間のイメージとは違った大学生活を送ると思うが、「明けない夜はない」ことを忘れず、1日1日を精一杯生きて行って欲しい。